



Title	「装備」の制作におけるシャルロット・ペリアンと ル・コルビュジエの共同性
Author(s)	千代, 章一郎
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 66-67
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86316
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

「装備」の制作におけるシャルロット・ペリアンと ル・コルビュジエの共同性

千代 章一郎 島根大学

はじめに

シャルロット・ペリアン（1903-1999）は、建築家ル・コルビュジエ（1887-1965）のアトリエに 10 年在籍し、ル・コルビュジエが「装備 équipement」と呼ぶ家具の近代化に大きく貢献した。そこで本発表では、ペリアンが実質的に関与したと考えられるル・コルビュジエのすべての構想を抽出し、具体的な制作事例の分析を通して、構想が生み出される過程における両者の相互作用について考察する。

そこでまず、ル・コルビュジエとペリアンの共同の形式を類型化して整理し、新しい家具の形式である「装備」の基本要素、「椅子・卓・棚」と「装備」から派生した要素（照明機器と衛生設備）に弁別し、各々の要素について経年分析することによって、両者の相互作用の変化の過程を明らかにする。

共同の形式

ル・コルビュジエとペリアンの共同事例を網羅的に精査すると、ペリアンのアトリエでの役割は概ね、4 種類に大別できる。すなわち、1) 装備要素のデザイン、2) 装備要素の空間配置 3) 建築物全体の設計、4) 共同署名した装備要素の単独使用である。経年的に見ると、ペリアンのアトリエ在籍時だけではなく、アトリエ退所後も両者の関係は続き、家具だけではなく、アトリエ入所当時から徐々にペリアンが空間デザインそのものに関わっていくことが分かる。

椅子

ル・コルビュジエはペリアンに託す以前から、家具使用、とりわけ椅子の座り方に関する身体動作の研究を始めていたが、入所後のペリアンにその研究の継続と具体化を指示している。

ペリアンはル・コルビュジエの動作研究の素描に基づき、鋼材の可塑的な可能性を追求しているが、可動性そのものの機構に関心を持ち、それを椅子のデザインに反映させている。

ル・コルビュジエのアトリエを離れてから、ペリアンは金属製椅子だけではなく木製椅子の可能性を追求していくが、ル・コルビュジエはペリアンとの共同である金属製椅子を含めて「オブジェ＝型」としての椅子を選択し続けている。

卓

椅子に続いてペリアンがアトリエで研究したのは、個人住宅の固定卓である。

回転椅子同様、金属製の固定卓もまた、同じ工業素材の可能性の探究であるが、脚と天板を視覚的に分節して重厚性を軽減した表現をペリアンは検討している。

その一方で、ペリアンは大理石の天板をより厚く、脚はより太くして、重厚性を演出しや卓をデザインしている。重厚な卓はとりわけ食卓に多い。ペリアンにおける食の空間の重要性の反映である。

ペリアンの退所後、椅子の場合と同様、ル・コルビュジエが卓の可能性を追求することはなく、むしろ壁への備え付けなどを追求していく。一方のペリアンは、さらに木製素材の机の造形的な可能

性を追求していく。ル・コルビュジェ以上に、ペリアンにとって食卓はアトリエ入所以前からの重要な主題であり続けている。

棚

ル・コルビュジェのアトリエ入所以前のペリアンの研究の中心は、卓と椅子が中心であった。ル・コルビュジェのアトリエでは、「棚」のさらなる研究がペリアンにとって新しい主題の一つとなった。

ペリアンは「棚」の規格化を一層進め、矩形に細分化した棚の単位を様々に組み合わせる技術を研究している。ル・コルビュジェは「棚」の設置手法を「壁沿い」「間仕切り壁として独立」「壁への組み込み」に整理する一方、ル・コルビュジェに任された住宅構想においてペリアンは壁に組み込まれた棚をデザインしていない。棚は一段と低く、より開放的である。

さらにペリアンは、壁に吊り下げられた中空の棚をデザインし、「雲 nuage」と名付けられたペリアン独自の可変的な棚の装備へと繋がっていく。

関連して、ペリアンはアトリエにおいて引戸棚の規格化の検討を始め、可動間仕切りとしての引戸を研究し、必要性に応じて室の構成を変えることのできる居住空間を研究している。

一方、ペリアンがアトリエ退所後のル・コルビュジェは、ペリアンの引戸を部分的に採用するものの、棚の装備は、壁への備え付けの重要性が増してくる。

照明機器

ペリアンは家具の開発を期待されてル・コルビュジェのアトリエに入所したが、間接照明機器も担当している。幾何学的な断面の金属板の覆いを用いた細長い照明を検討しているが、数は少ない。

ペリアン退所後のル・コルビュジェは数多くの独立設置型の人口照明を手がけ、彫刻的形状のシェードも新たに構想している。しかしペリアンは照明機器に関心を持たず、ル・コルビュジェの

開発した照明機器を自らのデザインに取り入れることもある。

衛生設備

衛生機器（台所、風呂、トイレ）の規格化の研究については、ペリアンはアトリエにおいて最初から関わった。ル・コルビュジェによる台所の機能性と風呂・トイレの集約化の検討であり、ペリアンの寄与の詳細を同定することはできない。

その後アトリエでは、衛生設備がペリアンによって主題的に研究される。ペリアンは細長い平面計画に合わせて、台所・風呂・トイレの水回り設備の台所中央配置を検討して解放的な「バー＝台所 bar-cuisine」としている。

ル・コルビュジェのアトリエ退所後のペリアンの住宅構想は「台所＝バー」を基調にしている。ル・コルビュジェが台所の開放性を主題化することはなく、比較的閉鎖的である。

おわりに

「装備」という概念が、ル・コルビュジェに出自があることはたしかである。しかしペリアンによる「装備」の研究は、単に「ル・コルビュジェの解釈」ではなかった。

たしかに、ペリアン自身の発想に「装備」と同じ種を持っていた。共同の経年分析から分かるのは、身体との呼応性、工業素材の可塑性や自然素材の特性などは両者に共通する発想である。だからこそ、ル・コルビュジェのアトリエ在籍時には「装備」という言葉を論文で使う必要もなく、むしろアトリエ退所後に「装備」を発展させる過程でこの概念を用いるようになる。

しかしながら、ル・コルビュジェにおいて「装備」がつねに空間構成という次元において研究されるとすれば、ペリアンは比較的身体動作という次元で研究が続けられる。両者の共同はその意味では、身体・空間の振幅において成立していたと考えることができる。